

くれ、全南へ出て、一路海岸を日ざして南下、夕方オランダ鎮という港町に着き、食糧は大部分軍の支援を受け、学校教室で共同生活。数日後、軍が船を出してくれ、巨文島に渡り、あき家になっていた大きな旅館あとで半月滞在、共同生活。島には四十人の軍人がいた。滞在中の現地人に交渉して、約五十屯級の機帆船二隻をやとい、日和を見ていよいよ故国へ向かい出港。もちろん、軍人一同も共に、途中流されて、福岡沖の大島に着いた。一泊して山口県の仙崎を目ざしたが、途中の角島に着いたが、船が直前座礁して死ぬような目にあい、軍人の機転でようやく港入りして二泊。ようやく本土に渡り、寺の広間を借りて三泊、疲れをいやし、長かった旅と皆に別れを告げそれぞれ故郷へ。

妻の実家へたどり着いたのが十一月四日午後であった。妻の長兄方は開拓団で満州錦西へ、次兄は宣撫官で中国へ。家には、母と姪の二人、心から喜んでくれた。ここからほんとうの引揚げ者の苦労が始まった。

## 涙のおにぎり

兵庫 鎌田 亦夫

当時主人は、南但の自動車会社に勤務、雄大な大陸へあこがれを持っていました。両親は、一人の男の子に夢を託しており、許しの出るはずがありません。そのとき、知人が、三菱茂山鉱山へ転任されたので、二、三年遊びに行ってくる程度で、両親の許しを得たのです。二歳になる男の子を連れて、清津に着き、支線に乗りかえて、目的地咸鏡北道茂山に到着。冬は零下四十度の極寒。うわさによれば馬賊が出るという。思わずがくせんとしましたが、いったん決心した以上は、茂山鉱山に夢をかけることにし、主人は庶務課に、私は寮の支配人となり、料理人一人、女中四人の朝鮮人とともに朝は四時半起床、朝食をつくり、七時に寮生を送り出し、昼食の弁当買い出し。夕食。夜勤の弁当と十時まででは体の休まるひまもなく、そんな毎日の繰り返し。その後、主人は昇格

したので寮をやめ、職員住宅へ移り、子どもも成長、小学校へ上がるようになりました。

一度孫の顔見せに内地へ帰ったさい「このまま帰らずにいてくれ」と頼まれたのをあと一、二年たったら、と再び朝鮮に帰ったのが親不孝の原因となり、戦争の渦中に巻きこまれ、これまでの人生が百八十度に転回しました。

毎日避難訓練があり、昭和二十年八月、ソ連軍清津に上陸。ただちに会社より避難命令が下り、貴重品と一週間の食料を持ち、白岩まで落ちのび、河原で夜をすごしました。翌朝、八月というのに毛布の上は霜で真っ白で、海拔何千メートルという高山。

私たちは、終戦も知らずに逃げまわって、一時も早く南下しようと山道を歩き、夜は河原に宿を取った。食料は底をつき、主人や子どもには十分とはいえないが食べさせた。私が山の中腹で行き倒れになっている所へ若い朝鮮人が「どうしたんですか」と声をかけてくれ、「私は大学を日本ですごし、お世話になりました。これを食べてください」と弁当を差し出した。涙と共に押し込んだ

き三人でわけ合っていた。こんな立派な親日家もおられました。

興南の町へ落ちつき、初めて終戦を知り、それから苦しい避難生活が始まったのです。たくわえは、一銭もありません。会社の寮に入れてもらい、残り物ももらい、男は朝鮮人の野良仕事、私は編物、セーター、チョッキを編み、昼の食事を子どもに持ち帰り、少しでも栄養の足しにしていました。その当時、十歳未満の子どもは、大半餓死してしまい、死んでいくわが子を見て、「この子は親孝行だ」と涙ながらに言っているのが哀れでなりません。この子だけは祖国へ連れて帰らなければと必死でした。ソ連から配給米がありました。わすかばかりなので、浜に出て昆布、わかめ等を拾って、薄く延ばし、中国人の畑から落ちていた菜を拾って帰り、それを食事代わりにしました。盃一杯二円の塩さえ買えません。食のない日もありました。身体は日増しにおとろえ、集団生活のため不衛生となり、発疹チフスがまんえんし、四十度の高熱にうめきながらも医療の手あてもできず、この世を去った人が連日。明日はわが身だと心の休まるひ

まも無い空虚な毎日でした。死人をむしろツトに包んで荒縄でしばり、棒につきさして共同墓地へ担いでいく葬式の列に次から次へと合い、手向けるお線香もなく、ただ手を合わせるばかりです。そのうちに、引揚げ開始の話がありました。デマに終わり、密航船で二十八度線を突破しようという話があり、同志を集めて、その資金稼ぎに、私も煉炭づくりをし、今晚決行しようと思にまぎれてボートに乗りこむところを発見され、男は全部連行され、一晚中留置場に入れられ翌朝「こんな考えをおこさず今一度許すから朝鮮のために働け」と説諭され、放免されました。いったん決心した以上、これで止まる気持ちはありません。その晩、再び命のはしくない者ばかりで決行しようと思。幸か不幸か、雨がジャンジャン降る中をボートで命からがら三十八度線を突破することができました。アメリカカ占領地に着いてからは、ひじょうに待遇もよく、一週間後の昭和二十一年六月ぶじ祖国へ帰ることができました。主人は、三十五年四月に、世を去りました。

## 平和で強い国であって欲しい

福岡県 有満昌子

明治三年糸島郡前原町に生まれた父は四十六歳の三月二十日下関港より翌二十一日朝鮮京城に到着、総督府の警察官講習所に入所し、卒業後、海州市の巡查を拝命、昭和五年、小富士村の水崎コヒナと結婚致しました。今になって思えば、忘れもしません昭和二十年の八月十五日の恨みの日から四、五日たって、父が事務所の引継ぎだといってそのまま帰っては来ませんでした。後でわかったことは、シベリアに送られひどい仕事をさせられ、伝染病の人達と同じ部屋に寝せられ、食べる物もろくろく貰えず、水、水、と言って死んでいったと聞きました。それは悲惨なものだったと聞かされました。そんな話を聞きたびに思いつくのは三十八度線越えのときのことです。

五歳の妹の手を引いて行く母を見失うまいと懸命に行